

皇紀二千六百二年  
昭和十七年五月一日

# 三原會志

三原會  
發行

第壹號

三原會發行

# 三原會規約

- 一、名 稱 本會ヲ三原會ト稱ス
- 二、目 的 本會ハ在京三原人相互ノ親睦ヲ圖ルヲ以テ主要ナル目的トス
- 三、會員ノ資格 三原市出身者又ハ縁故者ニ限ル
- 四、入 會 本會ニ入會セント欲スルモノハ會員ノ紹介ヲ要ス、紹介者ハ入會希望者ノ出生地、現住所及ビ職業氏名ヲ記シテ幹事ニ申込ムコト、入會後住所氏名又ハ職業ニ異動ヲ生ジタル場合ハ本人ヨリ必ズ幹事ニ通告スルコト
- 五、會 合 毎年春秋二回ニ總會及親睦會ヲ催スコト
- 六、會 報 毎年一回會報ヲ發行シ在京三原人相互ノ連絡ヲ圖ルコト
- 七、會 費 經常費トシテ毎年金壹圓也納入スルコト(但シ學生ハ不要)
- 八、會計報告 常任幹事ハ前年度ノ會計ヲ會報及ビ

總會席上ニテ報告スベシ

- 九、役 員 本會ハ左記ノ役員ヲ置ク
  - (イ)名譽會長 壹名 (推 薦)
  - (ロ)會 長 壹名 (選 任)
  - (ハ)評議員 若干名 (會長委囑)
  - (ニ)幹 事 (會長指名)
- 常任幹事 數名
- 當番幹事 若干名
- 幹事ハ一切ノ事務ヲ處理シ評議員之ヲ輔佐ス、役員選任ハ總會席上ニ於テ之ヲナシ二年目毎ニ改選ス、但シ再選ヲ妨ゲズ
- 十、事 務 所 本會事務所ヲ左記ニ設ク  
東京市神田區多町二ノ一 山根方
- 十一、規約ノ變更 本規約中改正ヲ要スル條項アル時ハ會員五名以上ノ同意ヲ得テ提議シ總會當日出席者ノ三分二以上ノ贊成ヲ得ル事ヲ要ス 以 上

# 三原會志

第壹號

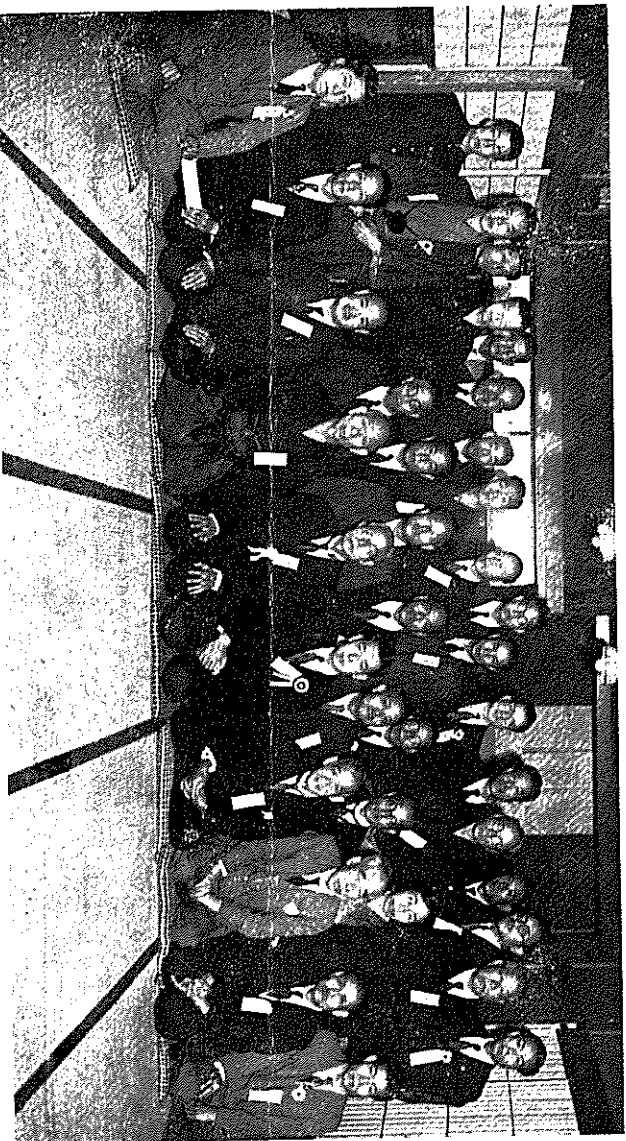
# 目次

三原會志の卷頭に題す……………一  
 三原會の結成を祝して……………三  
 三原會の前途を祝福す……………五  
 東京三原會の創立を祝す……………七  
 三原會報の發刊を祝して……………八  
 三原會の發會を祝して……………一〇  
 三原會誕生を祝して……………一三  
 三原會小誌……………一四  
 香港漫談……………一七  
 歸郷隨想……………二〇  
 三原會結成に就て……………二三  
 三原會雜感……………二六  
 三原會通信……………二九  
 本會記事……………三二  
 會員紹介……………三五  
 三會員消息……………三九

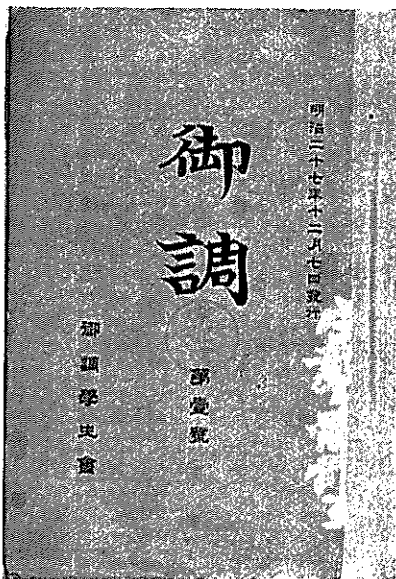
三原會會長……………淺野忠允……………一〇  
 三原會々長……………眞田秀吉……………一五  
 三原市長……………八原昌照……………一七  
 文學博士……………高楠順次郎……………一八  
 藝備之女主筆……………手島益雄……………二一  
 衆議院議員……………永山忠則……………二三  
 評議員……………宇都宮水城……………二四  
 前香港領事……………黃田多喜夫……………二七  
 會員……………花本秀夫……………三〇  
 常任幹事……………山根泰二……………三三  
 常任幹事……………石橋正孝……………三六  
 在三原……………原散人……………三九

## 三原會發會式紀念撮影

——「月水」世見仲草議於・日八月一十年六十和昭——



後列 石橋正孝 今井信夫 木村利喜知 杉慶南 式部甚平 吉村操 山根泰二 池田清次郎 勝克巴 宮本健三 宇都宮七五 戸木實 手島益雄 山下清 渡邊哲信 高旗昭夫 宇都宮友敏 山際章造 爲會員 胡淺野忠允 黃田多喜夫 稻田學而 眞田秀吉 遠藤英夫 宇都宮日綱 秦重博 花本秀夫 三好啓三 池田節夫 中列 花本チサヲ 大原將貴 長谷金彦 津田義人 本庄坐三 伊吹哲夫 森永誠 前列 石橋正孝 今井信夫 木村利喜知 杉慶南 式部甚平 吉村操 山根泰二 池田清次郎 勝克巴 宮本健三 宇都宮七五 戸木實 手島益雄 山下清 渡邊哲信 高旗昭夫 宇都宮友敏 山際章造 爲會員 胡淺野忠允 黃田多喜夫 稻田學而 眞田秀吉 遠藤英夫 宇都宮日綱 秦重博 花本秀夫 三好啓三 池田節夫 村上信一



(宇都宮七五氏所藏)

|| 解説 ||

「御調」は在京郷土會の會て有した唯一の機關雜誌であつた。當時、故花井卓藏博士、故勝島仙之介博士等の「御調同盟會」なるもの有り、別にその同根別派なる「御調學生會」が存した。

「御調」は實に此の「御調學生會」に依つて萬難を排し創刊せられたもので、時、恰も日清役勃發の明治二十七年十二月七日、第一號を出し、同三十一年六月十六日第四號を以て終卷となつた。決して永い壽命ではなかつたが、當時の學生の鬱勃たる青銀の氣、紙外に溢れ軒昂たる意氣は讀者を搏つものがある。

本文中、本會々員、高楠順次郎博士、秦孝道教授、渡邊哲信氏、時田田鶴女史等の消息も見へ、本會々長、眞田秀吉博士、評議員、宇都宮七五氏等亦紅顔の學徒として編輯委員に名を連ねてゐる。

明治天皇御製

思故郷 (明治三十七年 御年五十三歳)

たらちねのみおやのまし、故郷の

都はことにこひしかりけり

をさなくて住みし昔のありさまを

折にふれては思ひいでつ、

## 三原會志の卷頭に題す

在京三原會は、昭和十六年十一月八日、其の結成式を擧げ、茲に三原會志第一輯の發刊を見るに至る、誠に慶賀欣喜の至りに堪へない、嗚呼盛なる哉。

三原會は、其の郷土を同ふする在京三原市出身の人々の集團であり、三原市出身者とは、生々其の發展に寄與し、其の融和親睦と其の結束に資するの機關である。従つて三原會志は、三原市の内外聯絡疏通の使命遂行と、推移進展する郷土事情の報道、且又、會員相互の消息を傳へて、其の親交を厚くし、兼ねて郷土相互の利用厚生に資するを目的とする。要は郷土の眞姿に對する認識の涵養に外ならない。而かも之れに依りて郷土の修理固成の指針となり職分奉公の皇道完成に精進することを得ば、更らに其幸や大なりである。

大凡、人として郷土を愛し故郷思慕の情を忘却するものはあるまい、實に純正なる日本精神は、此の情操より哺み育てられ出づるのである。若し此の心なくんば、魚鳥の夫れにも劣ると云ふべきであらう。

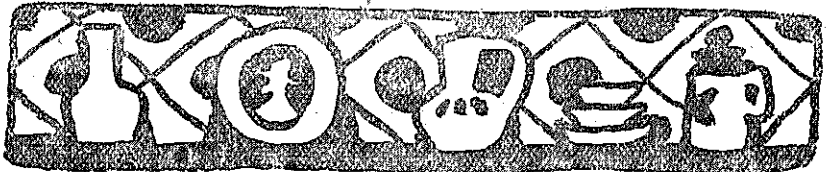
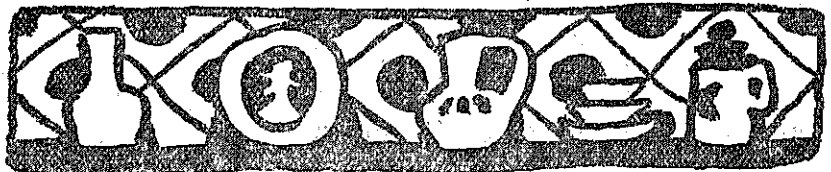
明治天皇御集を繙く時、我等は 一天萬乘の高きに位しまして、現人神と仰ぎ奉る 天皇にして、尙ほ且つ、其の呱呱の聲を揚げ給ふたる京都の地、生湯をお使ひ給ひし洛の地を、御心より御思慕あらせらるゝの御眞情、眞に惻々として、我等の心耳を打つもの、其の幾十首の多きを數ふる。

故郷難<sup>レ</sup>忘<sup>レ</sup>の念は、誰人にも心の奥に存し、愛郷の精神は人間本能の純であり、眞の日本精神、民族精神を哺むの搖籃である。

神功皇后の御船を泊し給ひし長井ノ浦。小早川隆景が築城と、其の終焉の三原城。頼家祖先發祥の三原。梁川星巖が、其の風光の美を天下に紹介したりし雙鷺洲。

我等、此の榮譽ある郷土に生を享くるもの、互に相親しみ、互に相助け。互に相信じ、互に相勵み。愛郷即ち愛國の基たるの信念により、長く以て、郷土的傳統と其の名譽とを護持し、大東亞建設邁進の一翼として、歩武堂々、其の面目を永久に維持せんことを希ふや切なるものがある。茲に所懐の一端を披瀝して、三

原會志の卷頭に題す。(昭和十七年四月 宇都宮水城誌す)



## 三原會成立を祝して

名譽會長  
男爵

淺野忠允

在京三原市出身者及縁故者の親睦を目的として、昨昭和十六年十一月八日を以て新しく三原會が組織成立されました事は私の非常な喜びとする所であります。幹事より御招きをいたゞき出席しました所、豫想外の——と申しますと幹事の御努力に對して失禮ではあります——誠に豫想外の盛會であり、和氣藹々たる會合でありました事は、私の喜びを更に大にした事は申すまでもありません。殊に若輩の私には多くの若い方々がまじつてをられる事が嬉しく思はれました。と申すのは、從來、中年以上の若干の方々にはお會ひする事もありましたが、若い方々にお會ひする機會は全然なかつたからです。世の中の郷土を中心とした會は多く同年輩の集りであり、若いものみの會か、中年以上のものみの會かになつてゐるやうですが、この三原會はさうした事がなく、お年寄もをられるし若い方々もおられ、家族的な會であることは誠に力強い限りです。しかも尙會員各位の現に活躍してをられる分野は各方面に及んでゐる事はこの會の基礎を益々固くしてをります。更に私には發會の日が十一月八日であつた事も今にしておもへば、この會の今後の發展を豫約してゐるやうに思へます。丁度一ヶ月たつた

十二月八日、その後の大戦果、これからの我々には八日といふ日が、他の一月三十日のいかなる日とも全く違つた意味をもつ重大な日となつたからです。いはゞ縁起の良い發足した會であるといへませう。

三原は今や一城下町の様相を一變し、廣島の三原、日本の三原から更に大東亞の三原へと飛躍せんとしてをります。我々の三原會もそれと共に發展成長すべきは期して待つべきものがあるであらませう。

私は若輩を以て名譽會長の御推薦をおうけし、誠に恐縮の至りでありまして、果してその任に勝へるや否やを慮る次第であります。しかし會長始め幹事の方々の陣容を拜見いたし、また定められた會期によれば名譽會長の職責なく、いさゝか意を強うし、御引受け申した次第であります。こゝに紙上を拜借して各位の今後の御指導御鞭撻をお願い申上げると共に、我々の三原會の末永き發展のため各位と共に努力いたしたき所存でをります。以上本會成立に努められた方々に深い感謝を捧げつゝ、少しく本會成立の所感を綴り擲筆いたします。

## 三原會の前途を祝福す

三原會々長 眞田秀吉

在京三原人士の三原會は、今回石橋正孝君外幹事諸氏の一方ならぬ御世話により成立し、創立第一回を昨年十一月八日淺草水月に於て開催せられたり。場所柄に似ず誠に閑靜上品にして、吾等の懇親を結ぶにふさはしきも

のありたり。淺野男爵を始め老人、青年、學生、無慮四十名集合し、始終和氣霽然たるものありて清き集ひなりき。

今回の三原會は實に第三期のものなり。第一期は「御調會」にして明治二十七八年頃、予等の學生時代に始まり、勝島、花井、高橋諸先輩の出席ありたり。當時は雜誌「御調」を發行し兩三年（四號迄）繼續したり。先輩中にも花井、田中義一の諸氏の特別の御骨折を得たるを今更乍ら感謝するものなり。

其後御調會は尾道會三原會に分裂し、尾道會は昨今餘り開催を見ざるも、三原會は少數の老會員堅實に繼續しつゝあり。是れ第二期と稱して可なるものなり。

今回のものは此第二期三原會に併合し而かも其人々を網羅包含せるものなれば、人數も多く夫々役員を具備せる點に於て飛躍的發展を見たるものなり。

今等は今や聖戰第七年目を迎へ驕慢の米英を一蹴し、一致團結、國難突破を精進しつゝあるの秋、三原會の大團結は誠に意義深きものあり。其運命又邦家の前途の如く光輝廣大を極むるものあるを思ひ、衷心より悦ぶと共に、吾が郷の誇とする名譽醉心を傾けて祝福するものなり。

尙一言郷里の有志諸兄に望む——本會は在京人の組織なれども、何分郷土會なるものは郷土を離れて成立せざることなれば、切に在郷諸賢の御援助を得たきことなり。本會は郷里と東京との連絡用務は精々勉むる積りなれば、諸君子は成るべく本會を御利用あらんことを希望す。又御上京の際は一報を賜はらば何かと御便宜御取計ら

ひ得ること、信す。

又、申し度きは御迷惑になる様のことば致さぬ筈なれば、其邊も御含みありて精々三原會御利用ありたく、且つ何分の御援助を切望する所なり。

## 東京三原會の創立を祝す

三原市長 八原昌照

同じ自然の懷ろに育まれ因襲、傳統、方言などを同じうする同郷の人々が、其の郷土を懷しみ愛する心から、互に相親しみ相結ぶは人情の自然であります。況や海山の美しくして觀眺饒なる備南の要衝、古來の名區であり勝地であり、新興工業都市として最も將來性ある三原市を郷土とせらるゝ人々に於てをやであります。されば此の度三原市御出身の先輩諸賢に依つて、東京三原會が創立せられたことは決して偶然でありませぬ。申す迄もなく郷土愛は之を推し擴げれば國家愛となる譯でありますし、同郷人の力は之を一團として結成するに伴ひ、ますます其の強大を加へるものであることに考へ及びますれば、何故本會がより早く結成の運に至らなかつたかと思ふ位であります。今や我が國は曠古の國難に直面致し、一億國民が半平たる結束と不退轉の決意とを以て總力を擧げて決戦態勢の確立強化に邁進しつゝあるの秋に方り、所謂水到つて渠成ると申しませうか、東京に於て芽

出度發會式を行はると共に、第一回親睦會を催され、更に會報の發行をも見るに至りましたに付ては、其の意  
義頗る深きものを覺へますと共に、爾來發起人の方々が熱心に斡旋盡力せられた結果に外ならずと拜察致  
し、感佩の念、感喜の情、交々臻るを禁ずることが出来ませぬ。茲に謹んで本會の創立を祝し、前途の健實なる  
進展を念願する次第であります。而して切に名譽會長を初め會長及其の他在京會員各位の御健安を禱り、今後三  
原市民及其の子弟等後進の指導誘掖に格別の御配慮を賜はるやう、且つ又常に三原市將來の發展と繁榮に思を致  
され、特に御協力下さるやう翹望して已まない次第であります。(昭和十六年十一月)

## 三原會報の發刊を祝して

文學博士 高 楠 順 次 郎

郷人をして常に山紫水明を誇らしめ、詩人をして永く細雨春帆を夢みしむるものは實に我が三原である。今よ  
り半世紀の前は、三原は閑靜な教學の府であつた。それは長谷川先生を中心とし、宇都宮、沼田その他の有力なる  
學者の結束宜しきを得たからであつた。その後の三原は町としての存在は持續せられたが、時には半農に歸する  
か、半漁に化するか、とにかく見る毎に悲哀を感じしむるものがあつた。然るに、一朝突如として新生面の開か  
るゝものがあつた。新たに生産の都となつたのである。次でその性格を轉じて市となつた。つまり大三原市の面

目を獲得したのである。併しこれは自己の力に依て獲得したのではなく、他己の力に依て附與せられたものであ  
つた。これも地の恵みとすれば郷土の愛すべき點はこゝにも存在するのである。たとひ、それが他山の石でも宜  
し、三原がこれに依て得る所が多ければそれで宜い。それが漁夫の利でも宜い、三原がこれに依て益する所が多  
ければそれで宜いと感ずるのも、亦郷土愛の一面であらう。

こゝに我々が考へなくてはならぬことがある。三原が會て有して居つた教學に依る人文創造の指導位から轉落  
して、新たに得た生産に依る生活利導の隨伴位に低下したとなつては、我々は三原の先輩に對して慚愧に耐えな  
い次第である。そこで來るべき時代に在つて三原市民諸君が一つの目標に向つて熱注し突進する努力を爲さん事  
を希望するのである。努力の目標は三原の管下に在る如何なる施設、經營に向つても、何れかの方面に於てこれ  
と接觸を保ち、何らかの指導位を得ると云ふことである。奉公と云はず營利と云はず、何れの施設、經營に於て  
も、その所在地は得て受動位に落ち、それより支拂ふ諸稅、諸拂、寄附金、辨償金等に依て利益して得々たるも  
のがあるのである。かゝる舊時代に行はれた習俗のないやうにすることは勿論であるが、常に彼の施設、經營の  
現實を明確に認識し、若しその現實に於て缺陷あれば、形相的にも、精神的にも、これを助けてこれを補ひ、若  
しその現實に於て學ぶべき所あれば、これに學び、相互に利すべきことあればこれを利し、若し經營者の市内に  
存在するもの多ければ、これが統制誘導の法を助成し、とにかく、現實に即應して相補互助の方法を講じ、恆に  
その施設、經營と歩調を合せ、進路を保ち、これと融合利導する爲に全市が努力することである。時にはかゝる



團體に於ては宗教的に利導することも効果的である。その例も多くある。精神的に鍊成することも重要性がある。その例も亦多い。團體訓練は何れもこれを行ひつゝあるのであるから、何れかの方法に於て、これに近接しこれを援助する道もあらう。とにかく、かゝる結合利導の可能性を常恆時に研究し發動するやう注意することである。その爲には市自體も相當に整備し統合しなくてはならぬ。特殊性ある都市には特別性の經始が重要である。これがやがて日本國民としての文化創造の大業に参加する所以である。郷土を離れて、首都に在留するものゝ忘れてはならぬ一大事である。大三原市をして全國の模範都市たらしむるやう在京有志の結束努力を希望して止まざる所以である。

散逸せる備後風土記は、スメル語の昔を語るべき重要な蘇民將來の話を載せて居つた。これは釋日本記にも引用してある。神代話の比婆物語もあつたに相違ない。我々の郷土は曾て和氣法均尼をして謫所の月を詠せしめたこともある。内外海運の中心地として神功皇后の御野立所であつたことも背かるゝ。スメル語でハラ・バラ・ワラは「天宮」や「王宮」の意で、太平洋のポリネシヤ、メラネシヤ、インドネシヤ、マレーシヤの諸語に通じて同じ意味であるから「御原」は神功皇后、若しくは八幡宮の御野立所であつたかも知れない。御調「水調」の名と並び、あらがち無理の推定でもないと思はるゝ。これも郷土愛の一つとして、こゝに添えて置く。

### 三原會の發會を祝して

藝備之女  
筆 手 島 益 雄

舊藝備の文瀆、三原よりは著名な人物が出て居る。近來では故博士勝島仙之助がある。此の人は詩人としても有名である。又、辯護士としては故花井卓藏がある。實業家としては故山科禮藏がある。現在生存して居る人で著名なのは文學博士高橋順次郎あり、眞田秀吉、村井二郎吉、長尾恒吉、宇都宮七五等、皆著名の人士である。これ等の人々が團結して今回三原會を作り、團結を固ふせん事を誓ふたのは實に以て時機に適した事である。殊に此の會の名譽會長として、男爵淺野忠允氏を戴いた事は、會の統一を取る上に於て有力である。凡そ會には忠實なる世話人が必要である。己れの名譽、利益を顧みずして奔走する有力なる人物が必要である。幸ひにして三原會には世話人として山根泰三氏を得たるを以て此會の前途洋々春の如きものあると思ふ。會は永くつゞくる事が必要である。毎月一回づゝ必ず集會する事が必要である。どうか三原會も毎月開會して會員の交際を盛んにせん事を希望しいさゝか祝意を表する次第である。

## 三原會誕生を祝して

衆議院議員 永山忠則

明治五年以來我國に浸透した個の優位を哲理とする米英的個人唯物主義教育を受けた皇國民は盛國以來の本然の姿である汝我的慈愛を以て結ばれ合つた家族主義の精神の有難さを忘却せんとするかに見へた。遂に昭和の初頭は救ひがたなき日本主義の危機であつた。こゝに於て先覺者は敢然起ち上つた。即ち五・一五事件以來、米英中心の自由主義原理の世界觀を排撃し皇道を中心とする國內革新、東亞新秩序建設の爲め身命を賭して自由主義陣營にその反省を追つた。然るに米英の金權萬能の思想謀略にかゝつてゐる我が指導者層は此の警鐘に覺醒せざるのみか、却て革新は危險思想なりとして反撃的態度に出で、帝國を護るものは吾が特權階級なりと豪語し自らの非理を覆ひて恬然米英の第五列的役割を演じて省る所がなかつたのである。されど天眞明道にして昭々乎たるは皇國の歴史に徴して違はざる所、遂に、舊臘十二月八日午前十一時長くも嚴かに米英撃滅の御詔勅は下つた。何たる感激ぞ。聖天子、睿慮の下、皇國は敢然として世界維新戰の火蓋を切り米英的自由主義文明の鐵鎖に楔を打込んだのである。

幸に二千六百年來の輝しき傳統を繼ぐ天孫民族たる皇國民は「承詔必繼」率然として本來の日本魂に醒め、勇

躍盛國の攝理を世界に光被すべく舉國一心の體制は立ち所に作られたのである。此の時外に於ては吾が忠勇無比なる海陸空の精銳が鬪鬩を入れざる電擊的策戰により忽ち全太平洋に連る敵の牙城を衝き東亞に於ける米英勢力は一瞬にして粉碎されたのである。何たる快ぞ。

斯くして皇軍は既に太平洋上天與の軍事、經濟の基要地を占據し、多年米英の桎梏に呻吟せる東亞諸民族をして皇道政治の惠典に浴せしむべく勇奮健闘しつゝあるのである。正に盛國の大理想は茲に於て具體的に顯現し、皇道原理に基く新世界確立の曉鐘はいみじくも大東亞の天地に鳴り響いてゐるのである。

嗚呼、神國日本の天業恢弘の時機は來た。我民族を指導力とする皇道世界經倫の神機は今こそ到來したのできる。生をこの聖代に享け此の大事業の遂行の礎石となる皇國民の名譽と光榮、之に過ぎるものがあらうか。

然し吾々はこの輝かしき戰果に酔つて許りは居られない。醒つて靜かに其の責務の重大さに思ひを致さなければならぬ。

此の秋に當り同志諸君の御盡力に依り、三原會の發生を見る。之全く神意に基く因縁と衷心慶祝の情に堪へぬ。舊來個々に分散して自由主義社會機構の列互の中にあつて、日々の生活戰に喘いでゐた我等郷土の士が、こゝに省る所あり、郷土愛によりて一つに結ばれ家族主義的親愛と團結の力により郷土魂の活用を以て邦家の爲挺身し得るは東洋民族の精華にして、事少なる一地方的なものと默殺せんとするは一滴一滴の水が遂に大海をなす現實を解せざる徒輩の謬見である。大事は常に先達の明識と努力に依りて完成される。

希くは吾が三原會は漠然たる集會に終らしめず、全體の中に個人を見出す強國以來の家族精神を根幹とする全志組織體となり、運用の妙を得て現段階に於ける皇國の使命達成に些の遲疑あらしめざる様、郷土魂の發揮を切望して止まぬ次第である。

### 三原會小誌

評議員 宇都宮水城

去る十一月八日、淺草仲見世水月に於て、三原會開催せられ、余も亦其の召集に應じて參會し、堂々颯爽たる青壯年の郷友五十餘名の人々に圍まれ、一夕郷土を語りて頗る爽快を覺へた。就中淺野男爵が、青年學徒の身を以て、終始溫顔怡々として、一人一人に應對せられ、又其の名譽會長就任の御挨拶には、極めて謙讓、以て其の徳の高きを示され、我等頗る其の名門の

出たるに感服するところがあつた。三原會の前途亦洋々たりである。

又、此日工學博士眞田秀吉君を會長に推して陣容を整

へ、三原會の成立を見るに至つた。即ち右は三原會當初の會合であり、所謂發會式の夫れである。

乍去、三原會と言ふ名こそ初めてなれ、實は此の會は、遠き明治の初期に於て、故松野英雄氏（國學院大學創立者）が自ら催主となり、芝公園某神宮の邸に於て營まれ、梅原、矢野、丹羽、其他數氏が會合し、勝島仙之助博士は、當時駒場農學校の一學生として出席せられたることは雜誌「御調」第一號に於て發表せられあり、其の由るところや遠く、且つ久しきものがある。但し當時三原も尾道も御調郡の都會地であり、其

の名も御調同盟會と命名せられ、年に一回乃至二回此會を開かれたのである。

其の後、在京の郷友漸次増加し、醫學士望月惇一、文學士杉江輔人、工學士西尾虎太郎、獸醫學士勝島仙之介、辯護士花井卓藏、同山科慎次郎等の諸氏を初め學生の數も増加し、明治の中期たる、二十七年御調學生會なるもの起り、其第一回は六月十日、九段下玉川茶亭に於て開き、第二回は九月二十三日同茶亭に、第三回を瀧ノ川に遠足し、十二月七日には神田明神境内開花樓に於て、秋期大會開から、爾來之を繼續し、第十二回は三十一年四月三十日外神田福田屋に於て開かる。此の間、雜誌「御調」第一號（明治廿七年十二月七日）より、第四號（三十一年六月十六日）發行せられ、同郷學生相互の交誼を保全し、智徳を開發するところがあつた。而かも毎年春秋二回大會を開きて、郷人の親睦を圖りたりしが、後ち其事中止し、尾道は獨立して市となりしが、爲め其名も明治の末期より大正

に至り、三原、尾道會と稱へられ、春秋二回其の親睦會を開きたりしも、此處十五六年間は是れ亦中止せられた。

而して、前記、御調誌上に其の名を見て、今や現存せるものは、其の郷土と在京者とを通じて、眞に寥々曠天の星の如く、秦孝道、奥田勝太郎、宇都宮七五、杉江田鶴子（今時田）、眞田秀吉、杉江俊夫、渡邊哲信、門田丹之助、竹村秀三郎、竹田秀、宇都宮惠鏡（今日綱）、青木精吉、澤井常四郎、齋藤修次郎、宇都宮泰藏、高楠順次郎、林秀次郎、中川松吉、木村大介の諸氏を數ふるのみにして、眞に隔世の感がある。僕も本年額齡六十七歳、此の世に生存しあるも不思議の感がある。

素より、郷土人親睦の機關としては、一年一度の廣島縣人新年宴會、飽微同好社、二火會あるも、是れは廣島縣人全般の社交團體であり、其の他、三原會なる一小團體あるも、是れは幼時より竹馬の友たる渡邊、



生の私宅を訪れた。黒眼鏡を掛けてゐるし相棒の様なものを連れてゐるし不気味な奴と思ひ用心し乍ら逢つて見ると、蔣介石のやり方を攻撃し、兄弟相闘ぐ愚を説き、自分は幼少の頃より米國、濠洲を遍歴し華僑の間に多少顔を知られてゐる故、この華僑を動員して日支和平の爲に貢献し度いといふ。論旨は一貫してゐるし、熱もあるのであるが、こんな手合はいくらもあることで、結局金を呉れといふのが落ちで何の役にも立たぬ男が多いので、見所のある奴とは思ひ乍ら、わざと素つ氣なく應對し具體案提示方を要求して置いたところ、數日後やつて来て、第一着手として香港で新聞を發行して一般支那人の發展に資し度い。但し最初から正面より和平を唱導すれば忽ち彈壓を受けるのみならず、賣れ行きも悪い故、最初は抗日紙と歩調を合せ漸次東洋平和の方向へ民衆を引きづる方針でやり度いとのことなので之に賛成し、新聞を發行させたのであつたが、爾來三年間この新聞は香港に於ける抗日紙

の中にあつて敢然、和平救國を標榜して、迫害と戦ひつゝ論陣を張り續けた。この男は今次、香港陥落後は益々自分の主義に邁進することであらう。

香港の陸軍參謀に「チャールズ・ボクサー」と云ふ大尉がゐた。僕の在任中に少佐になつたが「キヤプテン・ボクサー」と云つて日本人間に親しまれてゐた。數年前、日本に来て奈良の聯隊附きとして二年位、同地に滞在したかと思ふが、その間、島谷範士について劍道を學びスツカリ劍道に心酔し、自分で稽古着と道具を二揃え持つてゐる。お胴には自分の家の紋所を着けて一パンの劍客である。僕が擊劍をやることを聞いて盛に稽古を申込み來り、よく日本人小學校の講堂でやつたものだが、「ボクサー」君は揮まで用意し、頭から足まで日本式で、床にキチンと坐つて「お願ひします」とお辭儀をしてから始めるといふ工合であつた。

日本軍が九龍の英支國境まで占領した際には、道具

を擔いで日本軍の宿舎に出掛けて稽古をするといふ熱心さであつた。獨英戰勃發後、日英關係は段々悪化して來たのであるが、彼はよく戦争をやるんなら日本軍が獨乙軍とやり度い。其他の陸軍は相手にとつて不足だ、と氣焔を擧げてゐた。今度その野望が叶つて日本軍と戦へたのであるが、この戦で彼は抜劍して最つ先に指揮してゐる中に肩から脇腹に彈丸を受けた相である。日頃の心掛けに相應しく立派な態度であつたらしむ。「ボクサー」少佐は劍道に熱心であつたのみならず、日本と葡萄牙との交渉史についても造詣深く、「ポルトガル」語によるこの交渉史の著書がある。敵ながら天晴れの男であつた。

× × ×

十二月八日。戦争勃發と同時に香港攻略が開始されたのであるが、總領事館員初めに留民の消息は八日以來、杳として途絶へ陥落に至る迄の心配は一通りではなかつた。つひ半年程前途、一緒に勤務してゐた人々

ばかりで自分も、もし本省への轉勤が少し遅れてゐたら同様の苦勞をしたのであるから、毎日の新聞は勿論のこと其他あらゆる「ソース」を通じて。殘留諸民の安否を氣遣つたのであるが、遂に陥落の日まで分らなかつた。

先頃、矢野總領事が歸京され、つぶさに籠城の辛苦を聞いたが、感慨一入であつた。

× × ×

餘程、縁が深いものと見へて再び香港に行くことになつた。前には英國の領土たる香港へ日本の領事官として赴任したのであるが、今度は日本占領地たる同地へ、占領地總督府の役人として出掛けるのである。然もその間僅に十ヶ月。感慨深いものがある。(了)

(附記。黃田氏は三原町西町の出身。町立小學校より廣島一中、第一高校、東大を経て、米國を振り出しに外交官として活躍。香港領事として赴任の時は年齢僅に卅有三歳。外務省初まつて以來の若手領事

として當時新聞紙上に喧傳さる。劍道四段の猛者で一高時代より劍道都選手として活躍さる。

此度、香港總督府某要職に補せられ、前任と同じく匆忙の赴任を前にして此の稿を草された好意に深甚の謝意を表し度い。——石橋幹事

## 歸郷隨想

會員 花本 秀 夫

生れた故郷と云ふだけでは無く、住み暮したことのある者であれば皆懐し味を持つ三原。僅か半年か一年住んだ人の想出話にも、山の話、海の話春と秋の話夏と冬の話、尙幾つかの心地よい話が出る。その語り手は唯れでも、今一度三原で暮したい希望を追つて話し嬉しそうだ。私もそんな夢を見て居る。しかし私の此の夢が實現する頃迄には、元見た三原ではもう無くなつて居る筈だ。昨年六月に十日程歸つて見て、この變つて行く事に良い事と惜しい事との二通りが有る様に

丁目中橋の家も跡形も無くなつて、廣い舗装道路になり、川原小路も中庵小路も別の名に變つて居た様だ。本町も店の名前はそう變つて居る様には思はないのに通つて居て呼び込まれたのは陶器店の山下君と二三であつた。とりままして歩いた譯ではない。むしろ懐しさにキョロキョロしながら歩いた。その中、幼な顔で見知りの人が當主然と店に座つて居た家も何軒か有つた。自分の歳を數へて見ても四十を一つ越してしか居ないのに、驛へ降り町を歩いただけでは、もうどこからもお城の石垣は見へなくなつて居る。淨念寺の東門が無くなつて、石橋がコンクリートに變つて居た事も私には少し淋しかつた。カベリの塙が頭から降りてリヤカーで引かれて居た——。煮木を田樂釜にするオーケも、連根やイモを入れて擔ぐ圓包も、ザルも、皆このリヤカーに替つて居る。頬冠りが戦鬪帽に變つたのも強ち手拭が短くなつた事や、配給のせいばかりではなさそうだ。變つて行く物はこんな事だけではなから

思つた。例へば人絹工場が出来たり、五六年前までは都會に暮して居る私共には、工場らしく見なかつた幾つかの工場が、驛の附近から町を東西に二分する様な形で、擴張増大して居て、切立の稻荷さんなどから見ると、新興工業都市の様相を現し始めて居る。港に着いて居た舟の形も前とは少し變つて居た。沼田川に且つて淡海節の流行る頃かけられた木の橋は渡つても見ない内に新しい鐵筋コンクリートの大橋に架け變へられて此れも六七年は経つだらう。その橋向ふの和田もその川上の田の浦も、川下を海に出て上須波の鼻を廻つた向ふも三原市になつて居る。舊三原町のどの山に登つても、もう元の様に一目で見える事の出来る三原では無くなつて居た。此の發展の姿は良い面の一つである。そのかはり今の街を歩いて、行きずりに言葉を交はす事の出来る人の少くなつたのは、旅に出て居た故の私ばかりでは無さそうだ。本町の通りも近代的な商店風に變りつゝある。元私の親が時計店をして居た二

う。言葉にも多少の變化の有るのに氣附く。その他にも端々にほんの僅か宛つては有るが方向を變へつゝある様に覗がはれる。正月に棒飴を買つた子供は私共が最後で有つたか。春駒なぞ今も来て居るか知ら。灯影を水に寫して美しかつた夏祭は、濱が無くなつてからはどうなつて居るか。盆踊も歌だけになつて残つたが、八幡様の秋祭の角力だけは續けて居て欲しい一つだ。いの子のタコで道路をへこますのは、とつくに無くなつたが、年越しの晩の鬼の豆は、未だ子供にやつて居るか。それ／＼の時季が来れば思ひ出して見ても去年歸郷した時聞いては見なかつた。お月待ちの晩の和田のお地藏さんや、四月の鉢ヶ峯の虚空蔵様は、今も善男善女で賑つて居よう。此れ等の中には惜しまれとも良いものが有りそうである。

世界圖の上では針で押した程のこの地が指で數へられる位しか經た無い内にこんなにも變るのだ。大東亞戦争を契機として世界は一大轉換を以て變化する。大

陸に南方に東に西に飛躍した同胞が來年にその亦來年にどんな感慨で祖國を視る事だらうか。今私は故郷三原と想ひ合せて感無量なり。

「十年」と昔」の謠はもう通用し無くなる。

## 三原會結成に就て

常任幹事 山根 泰 二

皇威八紘に輝く皇紀二千六百二年の新春を迎ふるに當り謹みて聖壽の彌榮を壽ぎ奉ると共に併せて皇國の隆昌と異域萬里に勇奮作戰する皇軍將士の武運長久を祈る次第であります。

舊冬十二月八日、米英に對して宣戰の大詔渙發せられまするや神速果敢有史以來未曾有とも云ふべき大戦果をあげ敵は素より全世界をして震駭驚倒せしめたのは云ふまでもなく、御稜威の然らしむるところであります。又忠誠無比の皇軍將士の平素の練磨の賜であります。

ります。

此の郷土の發展につれ在京三原人士の發展も目覺しきものが有ります。此の在京三原人士を一丸とした親睦を目的とせる三原會をつくりたい事は我等の宿願でありましたが、偶々附屬の學友石橋君等が郷黨の大先輩宇都宮先生等の後援の下に先づ昨夏最初の口火を切り、愚生のところにも御相談がありましたので微力ながら御手傳ひする事にしたのであります。其後京橋の第一東洋軒にて第一回結成準備委員會を開催し、昨秋十一月八日豫想以上の御參會を得て無事三原會が生誕しましたのは御同慶至極であります。殊に名譽會長に淺野忠九男爵を戴き得ました事は無上の光榮であり、又會長に眞田博士を迎へ得ました事は今後會の發展向上の爲最大の強味と申さねばなりません。紙上を借りて厚く御禮申す次第で有ります。會は第一回としては非常に盛會で有り、殊に先輩の方々が多數御多忙中にも不拘御參會相成つたのは感謝の極みで有ります。

り、一億國民と共に感謝に堪へない次第であります。

此の大戦果の華々しい影に幾多將兵及び其の遺家族の方々の困苦突破の御努力に對して最大の敬意を表するものであります。我々も亦將來如何なる困難來る共それを克服し米英を屈服せしめ、東亞共榮圈確立の聖業を完成する爲に戦ひ抜かねばなりません。

此の歴史の時代に生れ合はせ、此の歴史の大偉業を分擔する我々日本人の光榮感激は、たとへる何物も無いので有ります。此の千載一遇の時を前にして昨秋親愛なる郷土人在京三原人士の親睦を目的とする三原會が生誕しましたのは祝福すべき事と申さねばなりません。

郷土三原は昔の三原では無く、其の地域も舊三原町に加ふるに糸崎、山中、西野、田野浦、須波の各町村をも含有し是等凡て我々少年時代懐しい思出の名前であります。近年工業的に躍進を遂げつゝ有り、街に近代的息吹きが流れ面目一新しましたのは欣快至極であります。

何分最初の會であり不慣れの爲幹事として不行届の點も多々有つた事は御寛恕願ひます。

幸、大體の骨組が出来ましたので之を基礎に逐年發展致す様、皆様の御協力を仰ぎ御智慧を拜借させて頂きたいと思ひます。尙、調査不充分の爲御案内洩れの方々も多く有る事と思ひますが、何卒各位で一人でも御存知の方に御入會して戴く様御盡力願ひたいと思ひます。

尙、當日決定致しました規約の中に有ります通り、三原會入會資格者は大三原出身者並びに三原に關聯を有する者とする事に御留意願ひたいのであります。永山代議士や花木チサヲ校長等は我々三十代の者には懐しい名前であり、共に會員である事は會に錦上更に花を添へるものと申さねばなりません。

尙、東京藝備社々長手島益雄辯護士が來賓として初總會に御出席賜はり有益な御話を拜聴出来ました事も感謝に堪へず、今後共側面よりの御後援を御願ひいたす



次第であります。豫告に有ります通り本年第一回總會も近く開催される見込ですから何卒皆様萬障御繰合せの上一人でも多く御參會の程待望しております。戦時下、皆様の益々御元氣で戦城奉公に邁進される事を祈ります。

## 三原會雜感

常任幹事 石橋 正孝

### 一、惠まれたる發足

我等の故郷三原は、帝人會社の誘引を契機として城下町の舊殻を蟬脱し新興工業都市として一大飛躍の途上に在る。是に呼應して在京三原會も故花井卓藏博士以來の七先輩に依つて僅かに存続し來つた從來の小小三原會を母胎とし、新に舊藩主淺野野爵をその中核として面目を一新した大三原會の再生し來つたのが昨年十一月八日。發會式後一ヶ月にして大東亞戰勃發し、肇

國二千六百有餘年建國の大理想の宇内に顯現されんとする洵に千載一遇の好機に逢ふ。爾來三ヶ月我等の會報を創刊するに當りては皇威既に大東亞に洽く、旭日燦として地球の南北を貫き輝く。我等國民の「こゝろ」も、個の島國を脱却し得て、洋々乎として南洋に擴がり、澎湃乎として北邊に膨脹する。猫額大の舊城下街から出生して、大東亞の盟主たる帝國の主都に蛸集し曠古の聖業に直接間接、翼贊奉公の誠を盡しつゝある郷土逸足の士を網羅し得た三原會は、その發足に於て洵に天與の好機を得た事を喜ぶと共に、洋々たるその前途を祝福せざるを得ない。

### 二、傳 統

今回の三原會は、新しく出來上つたものではない。今日の日本が、鎖國時代の日本と別箇なものではないと同じ意味で、新生三原會も亦、從來の郷土會と同じものであると謂へる。日本精神が如何なる表現の仕方をし様とも、肇國當時の大和魂とその根基に於て恒に

一であると同様、三原會が如何なる形式で生れ來やう共、その根本精神は常に最初の三原會精神と同じものである可き筈だ。私共、數名の準備委員は結成當初からその心構へでやつて來た。

新しい會を組織すると云ふ事ではなくて、我等の大先輩に依つて創始され、花井博士當時に大成され、現在、奥田、眞田、渡邊、宇都宮(日綱)、杉江、宇都宮(七五)、伊吹の七先輩に依り僅かに承傳され來つた郷土會の「聖火」を、三原會の設立を願求して切なる他の多くの若き三原人の心に、移し燃へ擴がらせると云ふ些細な仕事のみが、我々準備委員會に與へられた使命であつた。

傳統と云ふ事は尊ぶ可き事である。

今、三原會は、郷土の躍進に相應しき躍進を遂げ得た。その組織、運用に於て、あらゆる點に舊套を脱して新體制を要求される今日、特に會の中心に舊藩主を迎へ來つた事は、此の意味に於て重大なる意義が存す

る。我等の三原會は正に郷土會の正統を承傳するものである事を自負する。從來の郷土會の持つ、あらゆる榮光と歴史は即ち我等が三原會の所有である。

### 三、後輩の一人として

我々後輩は餘りに先輩を識らな過ぎた。私は後輩の一員として先輩諸賢に懺悔し告白せねばならない。私が三年前の春、初めて上京して先づ驚いた事は、三原出身者に案外名士が多い事であつた。その地位、闊歴に於て第一流の士が、意外に多い事であつた。そして更に驚きを深めた事は、是等社界第一流の名士がその郷里に於て殊にその後輩の間に、餘りにも知られてゐないと云ふ事實であつた。私は私の認識の缺如を内心慚愧もし濟まなく思つてゐるが、そのあやふやな認識すらも、私位の年代の後輩に取つては決して水準以下のものではない事を私は知つてゐる。

先日も或る學生が他郷の學生とその先輩達の情誼を



多分の羨望を以て語り、何故我等の郷里からは立派な先輩が出ぬだらうかと嘆いた。私は「君は一體、三原出身の先輩を何れ程識つてるか」と訊して、我々の會員中丈でも斯々是々の人が有ると尋氏指示した處、彼嗚然として「恠んなに立派な先輩が輩出してゐるとはチツとも知らなんだ」と自分の不明を恥じ、且つ「もう友人にも肩身の狭い思ひをせんで済む」と大いに意を強ふして歸つた事であつた。

「先輩が薄情だ」と言ふ恨み言を、在郷中チヨイ／＼耳にした事があつたが、上京してみても、薄情であつたのは寧ろ我々後輩の方であつた事を反省させられる。是程立派な先輩達を有し乍ら些かも彼等に就いて識る處がなく、社界が彼等を認むる何分の一すらも認むる處がない。同郷の後輩として是程、無禮はなく、是程の薄情はない。我々はもつと先輩を識らねばならぬ。そして是等の先輩を持つ事にもつと身近かな肉身的な矜持を持つていゝ筈である。

に歸一し奉るこゝろ、是である。毛利元就の有名な「弓矢の教」を享けた小早川隆景が、その承傳した教へを具現す可く築き上げた三原の城であり、そこより拓け初めた三原の町であつてみれば、三原こそは「和」の精神より發祥した街と云ふ可きであらう。然らば三原會の精神も「大和」を以てその第一義と爲す可きである。個人的世界的地位、名譽、閥閥等、總てを脱却して一個の素つ裸の「三原人」として、同郷人てふ一つの感情の中に溶け合つてこそ、初めて三原會は親睦の目的を遂げ得るのだと思ふ。

私は第一回懇親會にも、もつと多數の後輩に寄つて欲しかつた。三原會は成功者のみの會ではない筈だ。苦難を助け相ひ、慶祝を頌ち相ふのがその性格であらねばならない。荆棘の道を拓き進みつゝある壯年、驥足を延ばさんと野心滿々たる青年——是等一般の後輩に依つて其の席の多くは占めらる可き筈の處が、功成り名遂げられた、先輩達に比して、後輩の餘りに少數

#### 四、先輩諸氏に冀ふ

私は三原の先輩諸氏は總じて御謙讓が過ぎるのではないかと竊に考へる。私共、小學校乃至中學時代に先輩の風貌に接し得た事は勿論、噂すら聞いた記憶も乏しい。同郷の先輩の閥閥が感じ易い少年の心に如何に抜き難き印象を植へ付けるか、又先輩の動行がその純な向上心に如何に強烈な刺激となり得るか——と云ふ事に想ひを致され、過ぎた御謙讓から殊更に後輩の眼から御自身を隠さるゝ様な事のない様にお願ひし度い。否、もつと積極的に、郷黨の後輩の全てが、御自身の地位にまで追躡し來たる様、常に總てを後輩の前に露呈し、鞭撻と御指導を惜しまれざる様、特に切望して止まない。

#### 五、以和爲貴

十八條の憲法劈頭に聖德太子の唱導し玉へる精神は「和」のこゝろである。大和魂の常識を絶した無類の強さは、「大和」に存すると考へる。即ち小我を捨て中心

であつた事は遺憾であつた。我等下凡の根性は、兎もすると、弱者に對しては傲り、強者に逢へばいぢけ易い。先輩に逢ふのは窮屈だし、成功者の前では壓迫を感じる。私は恠うした卑屈なこゝろは、「水臭い」と自分で、反省する。

己と他とを常に對比する處に傲慢心が萌し、卑屈心が蔓こるのだと自戒する。郷里に在つてこそ、誰彼の區別こそつけ、東京では一様に「三原人」なのである。彼の悲境は三原人の悲境であり、彼の成功は三原人の成功である。三原人である自分も亦、彼の悲境を悲しみ彼の成功に歡喜する。此處に至つては、最早、傲慢も卑屈も無い。三原會は個人々々の寄り集りではなく個々をその細胞とする「三原人」なる一箇の有機體の謂ひでなければならぬ。個を立てゝは「和」は成立しない。個人主義はもう流行らないのである。

#### 六、適、不適

準備委員會の末席に連つた故を以て常任幹事の大使

を仰付かつた。適、不適と云ふ點から見れば私程不適人者はない。私は役にも立たぬ謙遜で左様云ふのではない。持病の喘息で青春の殆んどを病棟裡に過し、上京後、倅と病勢衰へ社界人になり得たと云ふも二ヶ年を超へず、人生はホンの初年兵に過ぎない。斯く告白すれば誰も適任者とは申されまい。然し禱つて考へれば、人的資源の缺乏の今日、まして他日の大成を期し寸時をも惜しんで精勵しつゝある我等同輩の中に、三原會等の非生産的な雑務を採る時間を持つ者は、自分以外には有り相にも思へないし、且又、國家的にも不經濟な話。落伍ついで之恩報じと思へば、その意味から云へば或ひは「適任者」であるかも知れない。

只々、自分の病弱が、三原會の機能を殺滅し、その活用に蹉躓を來す事のみ、心苦しく相濟まなく思ふ。敢て皆様の御海容を願ひ、御指導と御鞭撻を冀ふ所以である。(丁)

有りし片倉製絲三原工場は、國策上十六年十月以來閉社したるは惜しむべきも、既に工場は一切三菱重工業に買収された。

右の如き生産都市にふさわしき工業學校が、郷土人山中幸吉氏の發奮に依り設置され、校長に今井少將が熱心に訓育されてゐる事は、たのもしい限りである。

西町の中央に有りし三等郵便局も、二等に昇格し、市役所に近き處へ新築される事となつた。職業指導所は舊市役所跡にて商工會議所と寄合世帯を久しく續けつゝあつたが、人的資源確保の時代的要求に答へて有志の寄附を仰ぎ建設する事となりしも、適當なる敷地に悩み居りし處、山根氏の盡力にて、大阪土地會社所有地(師範前)二百坪の土地獲得の話もまとなり、之が爲會議所も指導所も新面目を施す日も近い。

三原人が旅から歸つて、いつも思ふ事は驛の貧弱な事である。之も大改築の計畫はあるが、時局柄、一時延期されたのは止むを得ない。然し、大三原市には三

## 三原通信

在三原 柞原散人

三原市の近況を通信する前に當市出身の戦歿英靈に對して感謝の意を表すると同時に、今尙戦線に御奮闘の將士の武運長久を祈るものである。

今回東京に三原會が出来た事を聞き、衷心より祝福する次第である。東京にも三原會が出来た様になつた程郷土三原も大三原となつたのである。

三原はつとに古城跡を以て名高く、古來名酒の産地として知られてゐる。三原が城下町の夢を破つて近代工業都市へと發展したのは、帝國人絹が此の地に大工場を建設して以來である。久しき町制より一躍市制を布き、大小の工場がこの地に集まり、最近は三菱重工業が勝田埋立地に建設中にて、其完成の日も近い。洵に堂々たる生産都市と稱すべきである。たゞ東町に

原、糸崎、須波の三驛が有り、中でも糸崎驛は、古來特急、急行各列車停車し、我等の誇りで有ると同時に多大の恩恵を受けてゐる。此の交通至便に加ふるに良港を控へてゐる事に、諸會社も注目したのであらうが三原市の發展は今後に有り、飽く迄時局に添つて、生産都市として發展するであらう。

三原市長は軍人出身の陸軍大佐で、前麻里布の町長たりし人である。移入市長とは云ふものゝ、元來國家觀念の強い人で、透明なる市政をとられてゐる事は三原人の喜びである。

三原市會も昔と違つて、眞面目に市政の運行を圖つてゐる事は目出度い。市會議長森三郎氏の努力も感謝すべきであらう。

三原市には現在、隣組が約六百組、町内會が六十有餘、聯合會町内會長が十、其の聯絡會も出來てゐて、其の運行は殊に目覺ましい。

兎に角、凡てが時局に即應し、生産都市の名に恥ぢ

ず、生き／＼と滅私奉公の實を擧げてゐるが、大三原市の姿である。

酒が十分手に入らぬ時節に酒の話は恐縮だが、酒は三原の固有の名産である。陸奥の三春の駒と三原酒とは、相並び名高いもので、幕府時代にも御殿酒として江戸に送られたものである。其の傳統的名聲は今も残り、天下の名釀地として、其の名を天下に謳はれてゐる。

酒の話の次は魚であるが、瀬戸内海殊に三原近邊の鯛は本場物だけに絶賛に値する。東京の三原會も三原の酒に生きの良し三原の魚で總會を開けば、情緒洵に拘すべきものがあらうが、時節柄、そんな贅澤も出来まい。東京三原人士は帝都で魚の配給を受ける度に、郷土の生きの良し魚を思ひ出すとの事であるが、此の節三原に居ても、以前の如くふんだんには賞味出来なかつたのは止むを得ない。

最近三原では異域萬里に赫々たる大戦果を擧げ、皇

### 本會記事

昭和十六年九月二十日 三原會結成準備委員會を京橋第一東洋軒に於て開催す。

- 出席者左の通り
- 村上 信一 山根 泰二 木村利喜知
- 宮本 健三 脇 克巳 泰 重博
- 石橋 正孝 以上七名

定刻、石橋委員三原會結成に就き趣旨説明、郷黨の先置宇都宮七五氏との會見報告を述べ一同結成促進を誓ひ、各自意見の交換をなす。

- 次で協議に移り左の事項を決定。
- 一、事務所を山根泰二君宅に置く
  - 二、村上信一、山根泰二、石橋正孝、三君を常務委員とし専ら準備工作に従事せしめ、他者は之を協力輔佐す
  - 三、石橋君をして宇都宮氏との連絡を保持し先輩層の勸説に努め且つその指導を導入せしめる事
  - 四、發企人々選及び交渉分擔
  - 五、會規約草案起稿、等
- 終つて、晚餐を俱にし久瀧を舒すると共に久方振りの懐し

感を八紘に輝かされた皇軍への感謝から、飛行機一臺献納の議もある。又人口の増加と共に國民學校増設は急務とされ土地物色中の由である。又年來の宿願の中國學校設置の議もある。いづれも實現させたい議ではある。

簡單ながら以上を以て三原市近況便りとし、今後未永く東京三原會の發展繼續を祈る次第である。

#### ○ 會費徴收

會報出版に伴ひ經常費不足を生じ至急會費取纏めの必要に迫られ候。昭和十七年會費未納の方は乍御手数、左記へ御拂込みに相成度候。

- 神田區多町二ノ一 山根 泰二
- (振替) 東京、一〇五、五六三番

#### ○ 會員獲得

折角、人と時を得て率先きき發足をせし三原會、龍頭蛇尾に終らざるは、一に會員各位の熱意に懸り候。在京三原人の一人をも本會の域外に居らしめざる様、御知友間に御勸説、御紹介賜り度、御協力の程切に願上候。

き郷友の噂等に夜の更くるを忘る。

昭和十六年十一月八日 三原會發會式並に第一回懇親會を淺草仲見世「水月」に於て、左記發企人の連名を以て召集す

#### 發企人 (順序不同)

- 眞田 秀吉 奥田勝太郎 渡邊 哲信 宇都宮日綱
- 杉江 俊夫 宇都宮七五 三好 庸作 伊吹 哲夫
- 式部 甚平 土岐 薫 津田 義人 山中 幸吉
- 木原 和敏 村上 信一 黄田多喜夫 泰 重博
- 大藤 享壯 木村利喜知 石橋 正孝 山根 泰二
- 脇 克巳 泰 重博 以上

當日、淺野男爵を初め遠く横濱、千葉より馳せ参ぜられし郷友先輩も有り望外の盛況たり。

村上委員開會を宣し、山根委員より経過報告ありて發會式に移り、石橋委員草案に依り衆議に關り別項の通り會規約を議決す。次で役員選任に移り多譽會長に淺野男爵、會長に眞田博士を満場一致にて各推戴、選任し、淺野男爵快諾の挨拶あり。眞田博士受諾の挨拶に次で新會長として別項の如く評議員、幹事を夫々委嘱、指命し陣容整ふ。

以上を以て無事發會式終了、引き續き第一回親睦會に移る。此夜唯一の來賓、廣島縣人會の肝煎りにて發備之女社長手島益雄氏立つて祝辭を述べられ、又、評議員にして本會の生みの親、宇都宮七五氏「三原會の沿革」に就いて興味津津たる

三原會の歴史を語る。終つて淺野名譽會長以下全員の自己紹介があり、石橋幹事不參會員齋氏の傳言を披露に及ぶ。

山根氏寄贈の故郷の美酒に一同蕩然たる「酔心」、話題は懐しき家郷の地の想ひ出、思はずも滑り出す丸出しの三原辯に遠く郷土を離れて帝都の中心地淺草に在り乍ら、宛然父祖の地に歸郷せし心地——宇都宮七五氏の言を借りれば「洵に盃中双鷺島を望む心地」して和氣満場に溢れ、宴果て、寒氣漸く嚴敷き街路に出で立つも、心中の暖かさは暫し寒風をも忘却せしなり。親睦を圖るてふ當初の意圖は十二分に達げたりと曰ふ可し。尙、當夜左記の御寄附あり。謹んで感謝の意を表す。

寄附金

- 一金貳拾圓也 淺野 男 爵殿
- 一金五圓也 眞田 秀 吉殿
- 一金五圓也 宇都宮七五殿
- 一金五圓也 今井 信 夫殿
- 一金參圓也 山下 清殿
- 一金參圓也 木村利喜知殿
- 名譽「酔心」 山根 泰 二殿

昭和十七年三月八日 有樂町鐵道協會に於て常任幹事會開催す。集會者、眞田會長、山根、石橋兩幹事(村上幹事不參)にして、本年度三原會の選用及び會報出版打合せを爲す。(村

上、山根、石橋記)

會費 領收

一金壹圓也	右正=領收候也	昭和十七年度會費
今井 信 夫殿	伊吹 哲 夫殿	池田 清次郎殿
池田 節 夫殿	石橋 正 孝殿	花本 秀 夫殿
花本チヲ殿	本庄 快 三殿	戸木 實 殿
長子谷金太郎殿	資田多喜夫殿	渡邊 哲 信殿
脇 克 巳殿	古村 護 殿	高旗 昭 夫殿
津田 義 人殿	村上 信 一殿	宇都宮 日 綱殿
宇都宮七五殿	宇都宮 文 藏殿	山下 清 殿
山根 泰 二殿	山際 章 造殿	眞田 秀 吉殿
木村利喜和殿	木原 將 貴殿	宮本 健 三殿
式部 甚 平殿	遠藤 英 夫殿	森 永 誠 殿
杉 慶 祐殿	(以上發會式當日)	
秦 重 德殿	時田 田 鶴殿	奥田 勝太郎殿
大谷喜四郎殿	大藤 享 壯殿	片岡 正 臣殿
片岡 正 士殿	長尾 恒 吉殿	永山 忠 則殿
永井 末 松殿	村井 二郎吉殿	野村よし子殿
山根 正 雄殿	松本 謙 次殿	青木 松 雄殿
齋 伯 守殿	坂本 純 造殿	三好 庸 作殿

門田丹之助殿 杉江 俊 夫殿 (三月十日迄)

一金五圓也

自昭和十七年度會費  
至昭和廿二年度會費

三好 松 吉殿

○以上を以て領收證に代へ申候間、左様御承被下度候  
昭和十七年三月十日

會計幹事 山根 泰 二

會員紹介

親睦、協力、團結、すべての根柢となるものは、お互に相齎ると云ふ事でありませぬ。猶大の土地に生れた我々として、今まで餘りに識らな過ぎた様です。疎遠の禍根は此處に胚胎するのではありますまいか。三原會結成に當り先づお互の認識を深め且つ正確を期する爲に左記につき各位の御回答を得ました。(編輯幹事)

- 一、出 身 地
- 二、現 住 所
- 三、職 業
- 四、略 歴

以上

(回答順)

- (一) 東京 男爵 淺野 忠 允
- (二) 世田ヶ谷區下馬二ノ六九
- (三) 蒙古研究所員
- (四) 大正二年七月二十日生 男爵 淺野 忠 允
- 武藏高等學校(七年制)
- 昭和十二年、東京帝大文學部東洋史學科卒業
- 會長 眞 田 秀 吉
- (一) 三原東町四一六
- (二) 大森區山王二ノ一九三一
- (三) 無一
- (四) 明治六年五月五日生。
- 明治十二年(七歳)三原東小學校ニ入ル(通リ町ニアリ、現今ノ女子師範ノ西側ニシテ長谷川恭平櫻南先生校長タリ、翌年東西兩小學校合併シテ舊城内ニ移リシガ十七年東町仲ノ町ニ新築東町校舎完成シ東西復分離ス然ルニ翌十八

年再び東西合併シテ齊城内ニ移リタリ、校長ハ沼田良藏先  
 生ナリ）十九年小學校中途退學ノ上、京都顯道學校ニ入り  
 二十一年同志社普通學校ニ轉ジ、二十二年在大阪ノ第三高  
 等中學校京都ニ新築移轉ノ際之ニ入学シ、二十七年學制改  
 正ノタメ第三高等中學校ハ解散シ全國各高等學校ニ分配サ  
 ル、中、第一高等學校ニ移リ、二十八年帝國大學工科大学  
 工學科ニ進入、三十一年卒業ス。  
 大學卒業後直チニ内務省土木局第五區土木監督署（在大阪）  
 ニ入り、澁川改修工事ニ從務ス（内務技師トシテ）。  
 四十四年東京ニ轉ジ、利根川改修工事擔任、大正三年歐米  
 各國ニ出張仰付ケラレ、同四年歸朝。  
 大正九年、工學博士、十三年高等官二等（勲任）内務省大  
 阪土木出張所長ニ補セラレ。昭和三年、東京土木出張所長  
 同九年五月退職。  
 正三位勲二等。

日本工學會、河川協會、港灣協會、道路改良會、全國砂防  
 協會ノ理事、評議員。前土木學會々長、帝國學士院土木科  
 學史委員、等々。

- (一) 三原六〇二番地
- (二) 日本橋區小舟町一ノ五
- (三) 麻糸及麻織物販賣業

池田 清次郎

(四) 大正十年上海東亞同文書院工科學業、東洋麻糸紡績三原  
 工場研究室精練部加工部主任技師を十三年勤め辭職後東京  
 にて現職開業、株式會社池田洋行、事務取締役、財團法人  
 六踏園理事。  
 (感想) 纖維業に關係して二十餘年、大東亞戰爭に會し物資不  
 足の折柄物の有難味が泌み、感じられる。そして物を買  
 つてやる賣つてやる式の歩み方では絕對に欲求する物が手  
 に入らなくなつた。金は値打がなくなつたと云ふけれど一  
 錢の金をも大切にしないと經濟戰で藤介石軍の降服が延び  
 る。支那國民性は金を大切にしが粘り強いから。大東亞戰爭  
 は、人、物、金、三者並行に大切な時代である。

杉江 俊夫

- (一) 三原西町 醫師杉江春二長男ニ生ル。
- (二) 中野區住吉町二七番地
- (三) 間接後授せる事業は別として直接從事せる職業は無之候
- (一) 豐田郡瀬戸田町大字福田
- (二) 杉並區上高井戸四丁目一、八九〇
- (三) 軍令部囑託
- (四) 退役海軍大佐
- (一) 三原西本町四丁目

坂本 純造

- (一) 本郷區根津片町一七
- (二) 大藏出版株式會社支配人
- (四) 明治卅四年五月廿九日三原に生る。大正十三年より東京  
 市在住、現在に及ぶ。

長子 谷金太郎

- (一) 三原東町
- (二) 芝區櫻田大左衛門町一
- (三) 自動車ボディ製作改造修繕
- (四) 大正十二年十一月上京創業「三原商會工場」と號す。
- (一) 三原本町一五五三
- (二) 澁橋區西大久保三ノ五〇
- (三) 日本大學電氣工學科第三學年生
- (一) 三原本町一五五四
- (二) 中野區鷺宮二丁目七七五
- (三) 日本機械製造工業組合聯合會、社員
- (四) 慶應中退官史より今日に至る
- (一) 三原西町 宇都宮源太郎三男
- (二) 千葉縣市川市中山二四二 日蓮宗大本山法華經寺貫首
- (三) 僧侶、東京博善株式會社々長、日蓮宗傳道株式會社々長

宇都宮 日綱

- 外數社取締役
- (四) 明治五年三月三原ニ生ル、九歳出家。十三歳得度、宗門  
 小中大學ヲ經テ教育ニ從事シ、後宗門行政ニ携ハリ、堺市  
 本山妙國寺、横濱妙香寺ヲ經テ現在ニ至ル。大正十三年東  
 京博善株式會社々長トナル。
  - (一) 三原西町一八八五
  - (二) 大森區調布鶴ノ木町一六九
  - (三) 黒田挾籠製作所 工場長
  - (四) 町立小學校ヲ經テ東京中學ニ遊ビ横濱高等工業學校機械  
 科ニ學ビ昭和六年卒業。同年黒田挾籠製作所ニ入社、機械  
 係長、製作所主任ヲ經テ現在ニ及ブ
  - 挾籠トハ限界ゲーシノ舊名ニシテ兵器航空機、自動車等大  
 量精密工作上部品ヲ一定寸法範圍内ニ置ク測定具ナリ、而  
 シテ本邦發祥地ハ吳工廠ニシテ前商工大臣伍堂草雄氏ノ砲  
 頭部長時代ナリト云フ。其故ヲ以テ同縣人ニシテ斯業ニ携  
 ルモノ多ク本邦業界ヲ牛耳レリ。就中、主ナル成功者ハ、  
 宇都宮製作所主、向井製作所主、  
 中村製作所主、三上製作所主、
  - (一) 三原市宗郷町五六五一
  - (二) 本郷區駒込西片町十番地にノ廿五號

式部 甚平

(三) 辯護士

- (四) 大正二年三月、日本大學法學科卒業。大正四年六月陸軍屬、大正六年四月青島守備隊軍政部長、大正十年三月以降辯護士開業今日ニ至ル

花 木 チ サ フ

- (一) 廣島縣山縣郡八重町三一六
- (二) 四谷區西信濃町一〇

- (三) 青年學校東京市本郷區眞砂實業女學校長

- (四) 廣島縣三原女子師範學校卒業、日本大學高師國漢文科卒業、三原女子附屬小學校訓導、東京四谷高等小學校訓導、東京市本郷區眞砂實業女學校長

(寸感) 四谷から本郷の學校へ移つた丈の事柄が珍しげに新聞に出る。それが珍しくないまでに女の世界が向上せねばならない。重責だ。大任だ。あたかもよし無人の家に嗣子除隊して歸る。然も職病なほ癒えきらず今又、入院是非ともなほさねばすまぬ、今一度お役に立つまでに。公務と看護のわづかの間隙を暇をとちて横臥はると、がんばれ訓練だ、感謝して……と強い力が私を鞭うつ。汗の病衣を洗つて屋上に干す夜明けの駿河寮、静かな大空に平和に紫雲たなびいて思はず合掌する旭光のあなた。此の大戦時下といふに、何といふ幸福な私共、お、みたまわれ……。

津 田 義 人

- (一) 三原本町二丁目一九七八

- (二) 芝區田村町二丁目二

- (三) 印刷用インキ製造販賣

- (四) 大正六年十月上京、大正十一年十月京橋區柳町にて印刷業開店、震災にて閉店歸郷。昭和二年印刷インキ製造販賣現在に至る。

宇 都 宮 七 五

- (一) 三原東町泰雲寺小路に呱呱の聲をあぐ

- (二) 世田谷區龜澤町四二六

- (三) 著述、赤穂義士の研究

- (四) 水産講習所、中央大學に業を修め、後ち製鹽技師、專賣局官吏、六十六銀行支配人を勤め、花井卓藏法律事務所を主宰し、以て今日に至る。此間一年志願兵出身の將校を以て再度従軍す。

伊 吹 哲 夫

- (一) 三原西町

- (二) 大森區田園圃布二丁目八三八

- (三) 眞崎大和鉛筆株式會社常務取締役

- (四) 三原尋常高等小學校、京都同志社中學、同大學經濟科卒業、大正十四年以來現職。

花 本 秀 夫

- (一) 三原西町圓光三七九

- (一) 小石川區指ヶ谷町一一四
- (二) 出版業

- (四) 昭和十四年迄大阪市ニテ土地建物會社ヲ經營ス、以後用版業ニ轉業シ今日ニ至ル。

脇 克 巳

- (一) 三原西町一〇六〇

- (二) 杉並區高圓寺六丁目七四七

- (三) 黒田挾製作所財務課

(四) 昭和七年早大商科を卒業後貿易商、徴兵保險會社を經、太東軍戰務發と共に現在の會社へ入社。其の間、日支事變に應召約三ケ年に亘り北支、滿洲、南支に轉戦せり。

奥 田 勝 太 郎

- (一) 三原市糸崎町

- (二) 半込區矢來町七九

- (三) 辯護士

- (四) 昭和六年發行「日本辯護士興信錄」寫本に依り御承知被下度候(以下興信錄)

氏は廣島縣の人、明治元年十二月を以て御岡郡糸崎町に生る。幼にして穎悟、郷里にて初等教育を卒え更に當時有名なる同郡三原町櫻南漢學塾並に大阪の碩儒藤澤南岳先生に師事し漢籍を修め、而して當時國會開設の氣運促進するや氏も亦、郷里より請願委員に選ばれ同郷の戸田十畝、松浦

某等と共に明治二十年冬頃上京し後藤象次郎伯其他知名の士を誼訪し共に盡す處あり氏は其儘止まりて中央大學(當時の英吉利法律學校)に學び明治二十四年八月同校を卒業す。同三十二年十月第一回の判檢事登用試験に及第、同年十二月長崎區裁判所に奉職、更に同三十五年七月判檢事登用第二回試験に合格して同年九月判事に任ぜらる。同月長崎裁判所判事を拜命、爾後長崎地方裁判所及廣島地方裁判所に轉任し、更に明治四十一年六月朝鮮政府に招聘せられ光州地方裁判所判事となり其後各地に轉任して令名を馳せ京城地方法院水原支廳上府判事より同法院春川地方法院支廳上府判事に至りて職を辭す。此間の勳功に依り正五位勳五等を賜はる。野に下りたる氏は尙元氣發洩として徒らに引退悠悠々自適するを欲せず上京して大正十四年四月東京に辯護士登録をなして開業す。然るに其多年に亘る斯界の經驗と蘊奥を以ての執務振りは忽ちにして江湖に喧傳せられ爾後順調に發展の途を辿り業務益々多忙を究めて居る。同業者間の信望も厚く、現に東京辯護士會常議員其他の役員に推されて斯界の爲め盡しつゝあり。

多年司法官たる爲め法庭職務に巧にして民、刑共に造詣深く幾多難件に其手腕を發揮しつゝある。多忙なるに拘らず一面閑雅なる志を持ち漢詩、圍碁、垂釣等を趣味とし殊に漢詩に至りては最も得意とする處である。

氏は又世相混亂の現世を憂へ且つ青年思想啓蒙の熱心なる指導者にしてよく寸暇をぬすんで盡してゐる。宗教は眞宗

本 庄 快 三

(一) 三原東町三八四

(二) 板橋區板橋町五丁目一〇二五

(三) 東京市技師、東京市養育院醫務課長、東京帝國大學醫學部講師

(四) 大正七年東京帝國大學醫科大學卒業、醫學博士

(一) 廣島市上流川町五〇番ノ三號

(二) 澁谷區代々木宮ヶ谷町一五二一

(三) 無 職

(四) 退役陸軍少將、(廣島詰三原藩士)家ニ生ル) 第一次世界大戰後帝國陸軍代表トシテ「ジュネーブ」ニ於ケル國際聯盟ニ活動中病ヲ以テ歸朝尋テ軍職ヲ離レ、爾來財團法人德備協會及ビ同草水會ノ常務理事トシテ就業ス。尙、獨逸大使館側ト謀リ日獨軍需品秘密交換軍事工作ヘ多年從事ス

(一) 三原東町

(二) 小石川區鴛籠町六七番地

(三) 日本發送電株式會社勤務

森 永 誠

(一) 三原東町

(二) 小石川區鴛籠町六七番地

(三) 日本發送電株式會社勤務

(四) 早稻田大學理工科電氣科卒業

大正三年——同七年迄三原電燈會社ニ勤務セシコトアリ、現在日本發送電株式會社ニ勤務中

永 井 末 松

(一) 三原西町

(二) 世田ヶ谷區成城町一七七

(三) 陸軍軍醫學校教官

(四) 附屬小學校卒業、東京醫專卒業、陸軍々醫科長、現在陸軍々醫學校教官、陸軍々醫少佐、醫學博士

(一) 廣島縣比婆郡敷留村板橋

(二) 四谷區三光町一

(三) 衆議院議員、大政翼賛會東亞局副部長、比婆郡敷留村々長

長

(四) 大正八年三月廣島縣師範學校卒業、同四月三原女子師範附屬小學校訓導、大正十五年敷留村々長(七回)、昭和五年縣會議員當選(二回)、昭和十一年衆議院議員(二回)

(一) 三原東町

(二) 神田區多町二丁目一

(三) 「醉心」東京支店長 大日本酒類販賣株式會社囑託

山 根 泰 二

東三十年。

(一) 三原東町

(二) 神奈川縣淵野邊驛前 小松莊内

(三) 准尉、陸軍兵器學校學生

(四) 三原附屬小學校卒業、陸軍工科學校卒業後戰車隊配屬トナリ滿州各地ニ轉戦ス、後、大連要塞司令部附トナリ昭和十六年末、陸軍兵器學校入學。

(一) 廣島市下流川町

(二) 杉並區清水町八三

(三) 退役陸軍少將 三原工業學校名譽校長

(四) 三原藩士(廣島詰) 今井潔次男ナリ廣島一中、陸士を経て軍籍に入る、日露戰役に陸軍中尉として參戰、功四級を賜はる。滿洲獨立守備隊長、靜岡聯隊區司令官、鯖江聯隊長等歴任の後豫備役編入。現在、明倫會其他各種公共團體理事、三原市に工業學校設立の議起り推されて名譽校長となる。

(一) 三原西濱

(二) 芝區三田南寺町十五

(三) 帝國インキ製造所社員

石 橋 正 孝

渡 邊 敏 男

今 井 信 夫

山 根 泰 二

石 橋 正 孝

山 根 正 雄

宇 都 宮 文 藏

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子

野 村 よ し 子



(四)三原附屬小學校第十一期生、福山中學校ニ學ブ、第四學年宿病(氣管支性喘息)改マリ遂ニ學業ヲ廢シ療養生活ニ入ル、昭和十五年三月上京、爾來、病寄蹟的ニ輕快ニ赴ク。同年十月ヨリ現在ノ會社ニ勤務ス。

(舊名繁人) 油 井 良 人

(一)三原西港町

(二)澁谷區原宿三ノ二九二

(三)諸機械設計スケッチ、製圖協會代表者

大東商工社

(未完)

○未着分は到着順に依り順次回會報に掲載可仕候間、必ず三原會事務所宛御通知被下度候

### 會員消息

○沼田多穉藏氏 目下北滿某要職に在る沼田中將は、三月十日附を以て功二級重光章下賜の榮譽を荷はれた。右は姫路聯隊長として又、企劃院第三部長としての赫々たる武功に對する行賞にして、同時叙勳の六十五將星中功二の光榮に輝く者僅かに七名、然も少將は沼田氏一人なる事を以てもその武功拔群なる事推測するに難くない。又、久しく絶版

なりし其の著者「日露陸戰新史」の先年再び上梓さるゝや、大東亞戰進展と共に愈々その眞價を認められ、用兵作戰を評する者の同著を引用するもの枚舉に遑あらず。氏の榮譽を共に悦ぶと共に、その武運長久を祈念して止まない。

○黃田多喜夫氏 本會評議員、前香港總領事黃田氏は二月初旬香港總督府某要職に補せられ、單身匆忙裡に赴任された。芽田度く日本大學卒業、直ちに明治製糖株式會社に入社、目下郷里の某部隊に入營公務服役中。

○池田快造氏 三原出身の新進洋畫家池田氏は昨秋の文展に力作「笛」を出品入選されしが微恙のため歸郷中なり。

○今井儋夫氏 本會評議員にして、三原工業學校名譽校長たる今井少將は、三月上旬歸原、爾來月餘に亘り生徒と共に起臥し、その熾烈なる軍人精神を以てスパルタ式教育を施行、同校をして地方教育界の一異彩たらしめてゐられる。同校卒業式後歸京、三月十日陸軍紀念日には伊豆方面に招聘され紀念講演に赴かる。

○高橋順次郎氏 郷黨の大先輩であり、佛教學者として國寶的存在である高橋博士は、伊豆伊東に避寒、研究執筆中であつたが、二月十八日神田共立講堂に於て開催されし眞如法親王讚仰講演會に講師として臨席さる。

○宮都宮七五氏 本會評議員にして義士研究の權威、宇都宮

舉げ挺身、翼贊議員としての使命を果さん事を期せらる。

### お願ひ

會員の動靜は如何なる些細な事でも同郷人の注意と興味をひかないと云ふ事はありません。消息を知り度いと希ふ心は即ち親愛の情であります。會員各位の消息を宏くお傳へするは本會報の持つ最も大きな使命の一つであると信じます。事の些大に不拘左記へ御通知下さる様特にお願ひ致しておきます。

神田區多町二ノ一 山根方 三原會事務所 (又ハ最寄りノ幹事宛)

### 會告

#### 總會豫告

昭和十七年度春季總會並に第貳回懇親會は来る五月下旬開催候間、御多用中とは拜察仕候得共、萬障お繰合せの上、舊つて御參會被下度、尙調査渡れの方多數可有之候に就き、御知友間に御廣告の上、御誘引賜はり度、特に願上候。追而、期日、會場の詳細は確定の上、改めて御案内可申上候。

氏は舊臘義士打入り當日より三月二十日切腹當日に至る前後にかけ、各種公私團體の招聘に應じ席の暖まる暇も無く義士精神昂揚を通じて國民精神作興に東奔西走せられつゝあり。

○山中幸吉氏 先に郷土三原に工業學校を寄附し財團法人とし自ら理事長として郷里の後進育英に貢獻しつゝある山中氏は過日その主宰する山中電機株式會社の名を以て金壹萬圓也國防獻金されたり。

○時田田鶴女史 女子三原出身者の先覺者であり、婦人矯風會の幹部として多年社會教育に盡瘁されつゝあつた女史は今回左記に移轉された。

横濱市中區唐澤十八

○宇都宮日綱氏 本會評議員にして大本山法華經寺貫首、宇都宮權大僧正は、道回創立されし帝都唯一の佛敎新聞たる「敎學新聞」社々長に推され就任さる。

○木村利喜知氏 本會幹事である同氏は、舊臘大森區鶴ノ木町に新居を新築。

○山根泰二氏 常任幹事山根氏は今回、大森區久ヶ原町一八〇に別宅を新築、月の三分ノ二は新居に在りて大日本酒類販賣會社囑託としての仕事に盡瘁せらるゝ由。

○永山忠則氏 本會評議員にして現代義士永山氏は今回の改選に當り故郷廣島縣第三區よりいち早く立候補の名乗りを



# 編輯後記

○ビルマ陥ち、今又、蘭印覆滅の報來り旭日大東亞に浴し。

此の紀念す可き、よき春、三原會々報を玉案下に捧ぐるを得る。欣快之に過ぐるものなし。

○發刊の延遷、種々理由はあれど言譯は不申、敢て幹事懈怠の罪を謝し大方の御海容に俟つのみ。

○淺野男爵を初め御多忙中、玉稿御惠與下された諸先報の御厚情感謝に不堪。

○特に、三原市長八原氏、藝備之女主筆手島益雄氏祝詞を寄せられ、高楠博士又、新興三原市の爲めに懇篤なる御教示を寄せらる、正に頂門の一針、三原人の銘記す可き事どもなり。玉稿周旋の勞を頂きし澤井三原圖書館長、坂本順造氏の御芳志と共に、深甚なる謝意を表す。

○表題は評議員、渡邊哲信氏に依頼せしもの同氏は在京大先輩中の一人にして本願寺顧問の現職に在る方、その玲瓏たる人格は高邁なる筆致に現れ、洵に本會報の金看板たるに相應しきものあるを感ず。厚く御禮申し上げる次第。

○尙本會の生みの親、宇都宮七五氏は本會報の爲めにも亦、産婆役として終始理解ある指導と御鞭撻を頂く。感銘の至りに不堪、特記して感謝の意を表す。

○俗務繁忙の寸暇、淺學拙才の身、加之余くの未経験を以て編輯に従事す。體裁の不備、校正の杜撰、或ひは非體に亘る點渺しとせず。敢て御寛容を乞ひ御叱正を冀ふ所以。

(編輯幹事石橋記)

昭和十七年五月五日印刷  
昭和十七年五月八日發行

東京市神田區多町二ノ一

編輯兼 山根 泰二

東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進 舎

東京市神田區多町二ノ一 山根方

發行所 三原會事務所

電話 神田(25)四一八一番  
(振替口座)東京、一〇五、五六三番

## 本會役員

名譽會長 男爵 淺野 忠 允  
會長 工學博士 眞田 秀 吉  
評議員 (いろは順)

陸軍少將 今井 信 夫  
三原工業學校名譽校長  
眞崎大和鉛筆專務取締役 伊 吹 哲 夫  
警視廳檢閱課長 秦 重 德  
本郷眞砂實業女學校校長 花 木 チ サ ラ  
山科汽船事務取締役 土 岐 薫  
山科汽船事務取締士 奥田 勝 太郎  
外務書記官 黃田 多 喜 夫  
本願寺顧問 渡 邊 哲 信  
衆議院議員 永 山 忠 則

## 幹事

法華經寺貫首 宇都宮 日 綱  
權大僧正 宇都宮 七 五  
義士研究家 山 中 幸 吉  
山中電機社長 山 際 章 造  
三原工業學校理事 山 際 章 造  
三好醫院長 三 好 庸 作  
辯護士 式 部 甚 平  
杉 江 俊 夫  
常任幹事 村上 信 一 山根 泰 二  
石橋 正 孝  
當番幹事 木村 利 喜 知 脇 克 巳  
遠藤 英 夫 稻田 杏 坡  
秦 重 博 以上

高楠 長尾 村井